

「哲学」の範囲内で考えられる事態ではない。「哲学」の側では、「すべてを説明」という企図のため、あくまでも宇宙と一つであるような無限の「自己」が出発点に置かれるが、第四編の「哲学」に余る「宗教」においては、「哲学」的な説明のための有用性ということとは別に、現にそのような無限なる「自己」ではありえていない、一人一人の現実の「自己」が切実な問題として出発点に置かれる。

『善の研究』の読者の中には、単に「哲学」の範囲内にとどまり、「すべてを説明する」ということのみに全関心を注いでしまう者もいるかもしれない。そういうあり方に対して、「第四編第一章」は、「哲学」に余る「宗教」の立場から、一人一人の「自己」の身上に問題を引き戻すものとして、『善の研究』全体の中でも独特の意義をもつと言いうことができるのではないだろうか。

後期西谷啓治の身体論

——大谷大学講義より——

小野 真

西谷啓治は、晩年の大谷大学講義（以下『講義』）において、彼独自の生命論、およびそれに基づく身体論を展開している。西谷の身体論は、「空」の思想と並ぶ大きな問題であるにもかかわらず、永らく地下鉅脈のように姿を潜め続け、『講義』において漸く姿を現わしてきた、との指摘がなされている。この西谷の身体論はどのようなものであろうか。

『講義』で現れた西谷の身体論の鍵概念は、self（「それ自身」、「自己」、「自性」等とも表現される）である。昭和四十六年度講義で初めて現れ、最初は粗削りで試行錯誤的に規定されているが、次第にその本質が明確にされていき、『講義』全体の通底音となっている。selfとは、「生きている物」の特別な在り方を指すものであり、「生」の概念といってもよい。さしあたって、selfは、「体の中に滲み込んで生きて働き」、「個物を個物として成り立」たせている、生きているという在り方そのものであるが、「部分を持ち寄っていくらそれを結び付けても本当の全体にはならないような仕方」での全体的で organic な統一を実現している。また、organic な統一の過程において、生き物が水や空気、食物を摂取することによって他の生物と繋がっている側面も、selfそのものを成り立たせる基盤でもある。

昭和五十年年度講義では、対象化できない act（作用）である self が、身体そのものに滲透しつつ、生き物を生かしている事柄がさらに発展的に次のように語られる。「生物が生物そのものとしてそこで成り立っている処」、生命の「一種の中心のよな処」である self は、生物の体という「形有るものの全体の何処にでも行き渡っていて、しかもそれ自身は形をもたない」。そういうものが「生物体の構造」の中に含まれているが、身体はそういった self の「直接の環境」ないし「第一次環境」である。身体には生命そのものが端的に現れているが、身体は一面 self が外の環境を自分の物にしてしまったような「内的環境」でもある。つまり「self そのものがそこへ自分を直接に

express している」。だから身体は「自然界の一面であると同時に、自己すなわち「自」とか「自性」とか「それ自身」と言われるようなもの、対象化できない本当の「内から」という、そういうもの」に属している。

self は自己展開として身体という表現をとり、そこにおいて self は世界を身体に映しだしながら、世界の中の個として世界全体との連関にあることを自覚する。また、「作用」としての self の淵源を考察すれば、「生かされて成り立っている、背後から生かされて成り立っているという、そういう存在の構造」をもっている。

このような self は、身体を介して、存在論的に超越的な次元と結びついている。「自性という事を徹底すると、それは世界と一つだから、つまり全体性としての世界がそこに映っているという事だから、自性は同時に無自性だということ」になる。「世界という立場を空という場合、しかし同時にそれが無自性空だというのは、それが個々の事象、事々物々の事象の根本である。自性は、根本的に無自性」である。また、self は生きているものを個別化するが、個別化する self の作用そのものが self を超えた大きな自然に由来する生かされたものである。すべての生命の根底に「全体を包む生命」、「大きな生命」というものがあり、「個体は超個体であるからこそ初めて個体であり得る」という超越的な在り方をしている。この二つの次元の事柄は、「浄土」、「仏国土」、「神の国」などの諸宗教の「身土」の問題のうちに示唆されていると西谷は指摘している。このように西谷の身体論は、本質的に「生きている」ことの

存在論的探求であり、この問題を介して、超越的次元が、自然のうちで生かされて生きる人間の身体の在り方を通じて、必然的に繋がってくることを明らかにしようとする射程を持つ。

鈴木大拙の道元理解

蓮 沼 直 應

近代の禅学者・鈴木大拙は臨済宗の円覚寺での参禅の経験をもとにして、膨大な量の著作を世に残した。そのような背景からか、「予は臨済の看話禅をよいものと思うてをる、只その弊を知りて其利をわすれぬやうにしさへすればよい」と論じ、彼は曹洞禅よりも臨済禅に高い評価を与えている。しかし他方で彼は、臨済と曹洞という区別については単に伝統的な宗派の歴史の違いであるとし、「禅は元来一味のものでなくてはならぬ」と論じている。

しかし、曹洞宗を建立した道元は臨済禅で強調される「見性」を悟りとして認めないなど、臨済禅に対して強い批判を加えていた。大拙の禅理解もまたこの「見性」を強調するものであるため、道元の臨済禅批判は大拙をもその範疇に含むかのように思われる。もし大拙が、臨済と曹洞を本来一つの「禅」としてみなしているとするならば、大拙は自らの立場を批判する相手を、自らの思想のうちに組み込もうとしていることになる。本発表では大拙が、その著作中においてこの点にどう対処しているかを明らかにした。しかしながら大拙は道元の臨済禅